川名博君の『教會』は可なり纏まつてゐる、大タイの調子も整つてゐる、夕陽の空の木の葉の間からすけて見える處が不充分で、何かオレンヂでも生つてゐるやうに感せられる、家根の上を黄なる色でボカしてあるのは、小刀細工に過ぎない。

南薫造君の作中では、『ウインゾー』『テームス河畔』の二點が優れてゐる。前者はよくローカルカラーが出てゐる。樹もよい。芝草もよい、空が殊によい。後者も巧まずして感情を遺憾なく捉へてある。他の諸作はよほど劣るやうに思はれた。

湯淺一郎氏は、外遊前より時々水彩畫に筆を執られた。一昨年の文部省展覽會に見た一點の水彩畫は、調子のキツイ快活な面白い繪であつた。此方面のお土産も澤山あらうと想像して居つた。果して澤山のお土産はあつたが、滿足すべき作の尠なきには、多少の失望を感ぜないでもない。多くスペインに於て寫生されたもので、强烈な色彩の對象の上に、其面白味を見出すのであるが、建物の日光を受けた輝きが、光りを含むだ色に見えなくて、繪具の色になつてゐるのは缺點といふことが出來やう。君の作中では『タホー川』が好きである。君の作は一二枚見るによく、澤山見ると感興がなくなると、或人は言つたが、同一作家の手になつたものは、たとへ場處が違つても、季節が違つても、どこか共通の點があるから、澤山見たら面白くなくなるのは當然であらう。併し、中には澤山見ても面白い繪をかく人もある。寫すべき場所によつて、畫き手の心持を變へるといふことは、其製作の結果に影響することは少なくはあるまい。

以上、原稿締切の期が逼つたゝめ、讀返しもせで其儘印刷所に廻すのである。作家に對し、言の禮を失ふた處もあらう。妄評罪を俟つ。（五月二十四日）

うはさ（太平洋畫會第一室第二室）

■動いてゐる繪がないね■アニマルも無いね■この鳩は燒物のやうだ■へエーこれが五十圓！高いもンだなア（戸張君の繪の前で）■白馬會の水繪をこゝへ持つて來たいね並べて見たら面白いだらう■並べるほどの繪は白馬會には無いぢやあないか■陳列もいゝが粧飾もいゝ竹の手摺のないのもいゝ■今時手摺ナンて見物人を馬鹿にしてゐらア日本畫なら知らないこと■この繪は欲しいね（木村君の『巴里郊外』の前で）■變な手だナア夏目君の『ひとりゐる』の前で）■これでも目がアタツてゐるのか（吉崎君の『うすび』の前で）■モー繪入目錄が出てゐる素早いナア■番人は玉揃ひだね番人が美人だと人物畫をかいた人に氣の毒に思ふよ■少しアクドイね（中林君の繪の前で）■シヅカモノといふのは何でせう（靜物畫の前で）■これはお安くないンだとね（石井君の『京女』の前で）

＊　＊　＊　＊　＊　＊